

氏名(本籍)	久保正秋(東京都)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	博乙第1,216号
学位授与年月日	平成8年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	運動部活動における「指導」概念の研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 片岡 暁 夫
副査	筑波大学教授 体育学博士 飯田 稔
副査	筑波大学助教授 博士(心理学) 吉田 茂
副査	筑波大学教授 山口 満

論文の内容の要旨

久保正秋氏提出の『運動部活動における「指導」概念の研究』という題目の論文は、序論、第1章～第5章、結論および文献目録から成り、本文313ページ、文献目録4ページ、合計317ページ（1ページ当たり972字。400字詰原稿用紙で合計約770枚に相当する。）となっており、その他7ページ（目次6ページ、謝辞1ページ）、総計324ページとなっている。

本論文は、「競技スポーツを教えることは教育である(べき)」という教育の規範的理論を論議するための「概念」の明瞭化を計るために、「競技スポーツを教える」という働きかけを表す、運動部活動における「指導」概念の構造を解明したものである。

運動部活動における「指導」概念の構造を解明するにあたって、著者は5つの課題を提示する。第1の課題は、運動部活動における「指導」概念の曖昧さとその意味の分化を明らかにし、それに代わる新しい概念の条件を設定すること。第2の課題は、新しい概念「コーチング・アドミニストレーション」を提示し、その基本構造を明らかにすること。第3の課題は、「コーチング・アドミニストレーション」の文脈を分析し、その階層構造を明らかにすること。第4の課題は、その文脈の相違による階層構造の有効性を検証すること。第5の課題は、新しい概念「コーチング・アドミニストレーション」を学校教育の場に代入し、その意味を明らかにすることである。

序論では、運動部活動における「指導」および「コーチング」に関連する先行研究の批判的検討をふまえて、研究の課題と方法を整理している。

第1章『「指導(コーチング)」に関する問題点』では、運動部活動における「指導」あるいは「コーチング」を対象として、その現状の問題点を検討している。そして、「指導(コーチング)」に関する問題の全体的な領域および「指導者(コーチ)」の働きかけの多重性を明らかにし、「競技スポーツを教えることは教育である(べき)」という従来の教育の規範的理論が「教育的な意図と目的」が不明確なままに主張されていることを批判している。さらにわが国の運動部活動に関して用いられている「指導」という言葉をScheffler, I. の「教えること(ティーチング)」という概念を含む言説の三区区分に従って分類することによって、運動部活動における「指導」という言葉が、「教えること(ティーチング)」の概念を超える意味、すなわち「(技能の卓越を目指して)…をできるように訓練する」、および「(目標の達成を目指して)目標へと向かうよう統率(リード)する」という意味を有し、それは「コーチング」という言葉と交換可能であることを明らかにしている。

第2章『「コーチング・アドミニストレーション」の概念』では、第1章で明らかにされた、運動部活動における「指導」という言葉に含まれる「(目標の達成を目指して) 目標へと向かうよう統率(リード)する」という働きかけを、「コーチング・アドミニストレーション」という新しい概念によって示し、その基本構造を検討している。そしてその基本構造とは、競技集団の「勝利」を目指した、「哲学」「計画」「組織化」「経営」「評価」の各領域から成る連続した一連のプロセスであることを明らかにしている。

第3章『「コーチング・アドミニストレーション」の文脈』では、「コーチング・アドミニストレーション」の「勝利」へ向けての実践の原動力(動機)の相違に注目し、「価値」を指標としたパラダイムを導入し、その文脈を分析している。そして「コーチング・アドミニストレーション」は、感情的文脈「勝利は好い(好ましい)ものである」、功利的文脈「勝利は良い(役に立つ)ものである」、および超越的文脈「勝利は善い(絶対的な)ものである」という異なる文脈において読み取ることが可能であり、教育の規範的理論の論議のためには、その階層的な構造に注目する必要性を明らかにしている。

第4章『「指導者(コーチ)の元型』では、「コーチング・アドミニストレーション」の文脈の相違に基づいた階層的な構造の有効性を検証するために、「価値パラダイム」における各タイプの価値を一般的に包含するような「指導者(コーチ)の元型」を演繹的に論じている。そして「指導者(コーチ)」を、勝利による自己の快楽、そして成功と名声を目指す「コーチ(キャリアリスト)」、人々のコンセンサスを得ることを意図する「コーチ(ポリティシャン)」、勝利が結果として集団全体に利益をもたらす(役に立つ)が故に追求する「コーチ(テクニシャン)」、および自らの信念と意志に基づいて勝利を追求する「コーチ(ポエット)」として概念化し、「コーチング・アドミニストレーション」を階層的に捉えることの有効性を明らかにしている。

第5章『運動部活動における「指導」の意味』では、「コーチング・アドミニストレーション」の概念を学校教育に代入し、それが意味することを検討している。まず、わが国の「運動部活動」の制度的変遷を検討することによって、学校教育の場における「運動部活動」が、「教育的」な意図と「競技」的な意図との二重性の上に成立していることを明らかにしている。次にこの「運動部活動」の場を、生徒(選手)への人間的な関心に方向付けられたベクトル(教育の論理)が支配する「教育的空間」と、勝利へと方向付けられたベクトル(スポーツの論理)が支配する「競技的空間」とから成る「教育的/競技的二重空間」として設定し、この「教育的/競技的二重空間」に「コーチング・アドミニストレーション」の概念を代入し、その意味することを分析している。その結果、学校教育の場において「コーチング・アドミニストレーション」は、学校の教育的な価値に基づいて計画されたひとつの手段としての運動部の活動、それを「統率(リード)」することを意味するが、競技集団としての目標、「勝利追求」を否定するものではないこと、それ故に「教育的/競技的二重空間」の競技的空間に支配的なサブカルチャーの影響により、教育的な価値の達成ではなく、「計画」された目標の達成、すなわち「勝利を得ることができたか」によって評価される蓋然性があること、「教育的/競技的二重空間」において「コーチング・アドミニストレーション」は、勝利を「好い」という感情や「善い」という信念で追求するのではなく「良い(児童生徒の成長のために役に立つ)」という認識に基づいて追求することが有効であること、を明らかにしている。さらに第5章の最後の部分において、ここまでの検討を踏まえて、運動部活動における「指導」という言葉で表されてきた働きかけが「教育である(べき)」と主張するために必要な論点が考察されている。

結論では、運動部活動においては「指導」という多くの意味を含む言葉を使用することによって、日々の苛酷な「訓練」そのものが、あるいは自己中心的な快楽や信念に基づいた勝利への「コーチング・アドミニストレーション」が「人間形成」であるかのように主張されてしまう点を批判し、このような誤謬を避けるためにも、運動部活動における「指導」が意味する、「規範の獲得を目指して教える」、「技能の獲得を目指して教える」、「技能の卓越を目指して訓練する」、「勝利を目指したコーチング・アドミニストレーション」という異なる働きかけを明確に区分して論議を深めていく必要があると結論している。

審査の結果の要旨

本論文は、運動部活動における「指導」概念を分析し、新たに「コーチング・アドミニストレーション」という概念を提示し、その構造を解明したものであり、欧米においてもわが国においても類例が少なく、体育・スポーツにおけるコーチングの哲学的研究に大いに貢献する論文である。

特に、運動部活動における「指導」という言葉の意味の分化を明らかにしたこと。これによって教育の規範的理論の論議に具体性を与えたこと。また、「コーチング・アドミニストレーション」の分析において、その「機能」を対象とした生産性を高めるための「方法」ではなく、「目的」を対象とした「価値」を指標としてその階層構造を明らかにしたこと。これによって、勝利主義者として批判されるような、あるいは教育者として尊ばれるような「指導者（コーチ）」を、従来とは異なる観点から分析することの可能性を明らかにしたこと。ここに、この論文の独自性がある。

よって、著者は博士（工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。